

# 水稻疎植栽培の葉いもち発生の特徴

福島県農業総合センター 生産環境部作物保護科

## 1 部門名

水稻 - 水稻 - 病害虫発生

## 2 担当者

山田真孝・皆川博孝

## 3 要旨

水稻有機栽培において、いもち病の発生を抑制する目的で極端な疎植栽培(30×30cm)が行なわれることがある。そこで疎植栽培のいもち病発病抑制効果と抑草を目的とした移植後の有機物施用が葉いもち発病に及ぼす影響も検討した。なお、本試験は初発前に各区中央に罹病苗を接種し、雑草の影響を排除するため除草剤を使用した。

- (1) 葉色は、栽植密度で見た場合、調査期間を通じて、30×30cm区 > 20×30cm区 > 15×30cm区であった(図1)。
- (2) 株あたり茎数は、6月下旬以降、30×30cm区 > 20×30cm区 > 15×30cm区であった(図2)。1平方メートルあたりの茎数は、6月下旬から出穂期まで、15×30cm区 > 20×30cm区 > 30×30cm区であったが、出穂期にほぼ同程度になった。
- (3) 2007年の葉いもちの初発生は6月6半旬で、7月下旬までは栽植密度が低いほど葉いもちの発生が少なかったが、8月上旬には30×30cm区 > 20×30cm区 > 15×30cm区の順に発生が多い傾向が認められた。また、移植後の有機物施用は葉いもちの発生を助長した(図3)。
- (4) 2008年の葉いもちの初発生は7月1半旬で、7月の中旬から30×30cm区 > 20×30cm区 > 15×30cm区の順に発生が多い傾向が認められた(図4)。
- (5) 以上の結果から、30×30cmのような極端な疎植栽培は、慣行栽培に比べ、7月上旬までは葉いもち抑制効果は認められるが、その後、葉いもちに対する感受性が高く維持され、7月中旬以降、上位葉で葉いもちが急激に進展する場合がある。また、抑草を目的とした有機物施用は葉いもちの発生を助長した。

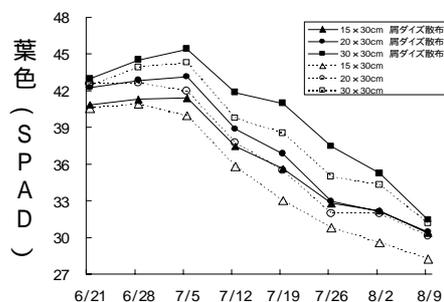


図1 水稻栽植密度と葉色(2007年)

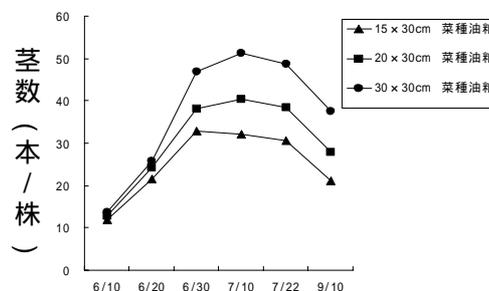


図2 水稻栽植密度と株あたり茎数(2008年)

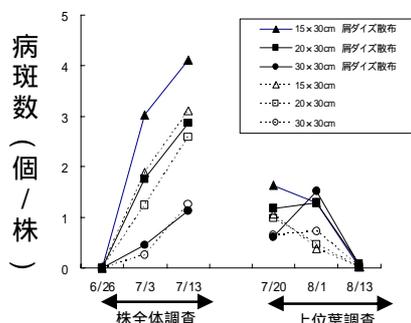


図3 水稻栽植密度と葉いもち発病程度(2007年)  
7月13日までは株全体、7月20日以降は上位葉を調査した。

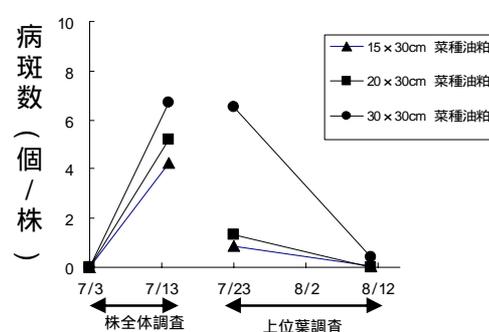


図4 水稻栽植密度と葉いもち発病程度(2008年)  
7月14日までは株全体、7月23日以降は上位葉を調査した。

## 4 主な参考文献・資料

- (1) 平成18～20年度福島県農業総合センター試験成績概要(2006～2008)